

大学レベルにおける英語筆記体に関する実態・認識調査と筆記体の習得度調査結果

ヤーッコラ伊勢井敏子

中部大学人文学部英語英米文化学科 〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1,200

E-mail: tiseij@isc.chubu.ac.jp

概要 英語筆記体の読み書きができない高校卒以上の学生が多くなって久しい。しかし、大学レベルの英語学習者のその実態や認識についての調査研究は非常に少ない。そのため、大学レベルの5専攻の新入生に対して、英語筆記体に関する実態および認識調査と筆記体の習得度テストを実施した。結果、449名のうち筆記体の学習経験は28%に過ぎず、学習した場合は中学時代が中心であった。筆記体の読み書きができる比率よりできない比率のほうがずっと高く、書けない比率は読めない比率より高かった。筆記体が板書される時、読めないままにして困った学生が42%いて、さらにその44%は読めないまま過ごしてきた。筆記体が読み書きできるほうが良いと思う学生が86%と圧倒的に多く、筆記体が読み書きできたら将来良いことがあると思う率は約7割に達した。筆記体の習得度については、小文字より大文字が書けない比率が高かった。専攻に関係なく書けないアルファベットに共通点があった。以上から、高校を卒業するまでに筆記体の学習機会をあまり与えられなかったが故に読み書きできないという結果が導かれたと言える。他方、読み書きできたら良いという願望が強く、それが将来の利益につながると認識していることも分かった。故に、学習効果も考慮しながら、英語筆記体指導のあり方について再考を促す必要がある。

Surveys on reading and writing ability and awareness of English handwriting at university level

Toshiko Isei-Jaakkola

College of Humanities, Chubu University, 1,200 Matsumoto, Kasugai, 487-8501 Japan

E-mail: tiseij@isc.chubu.ac.jp

Abstract Surveys were conducted based on 449 freshmen majoring in five different subjects, concerning their reading and writing ability and awareness of English handwriting at university level. The results showed that only 28 percent commanded this skill, the majority having been educated at a junior high school, and the general tendency was that they were unable to read or write satisfactorily, and that they ignored what they were unable to read when written on a blackboard. The low percentage of their skill strongly suggests that they were not given a sufficient opportunity to learn. Nevertheless, 86 percent of these students wish to read and write fluently, the majority of them believing they will benefit from this in the future. This implies the method of teaching English handwriting should be reconsidered, taking into account its learning effect, although not at the university level.

Keywords: English handwriting, surveys of skills and awareness, university level, different majors

1. はじめに

1.1. 研究背景

高校卒以上の大学生レベルで英語の筆記体が読み書きできないことが英語力に必ずしも関係なく普通のことになっている。そのため、英語教員としてブロック体で板書せざるをえない場面が多くなった。学生に

聞くと中学・高校で筆記体を習っていないという返答がよく返ってくる。日本語を母語とする英語学習者にとって筆記体は学習する必要はないのだろうか。英語教員は筆記体を教える必要はすでになくなっているのだろうか。

本研究に関連した先行研究は[1]を除きほとんど見られない。シラバスや英語教育全体の中でわずかに触

れられているのみである。それは実態調査あるいは筆記体についての学習者の認識について調査されたものではない。むしろ教育者の観点からの記述が圧倒的である。また、「筆記体」で検索すると、現在文字認識の研究が専らであることがわかる。これ以外は、文字の歴史などの文献(例, [2], [3])に少し筆記体の説明があるだけである。

上記疑問に答えるため、大学レベル(看護専門学校を含む)の学生に対して、(1)英語の筆記体の教育歴や学習者としての筆記体に関する認識、そして(2)読み書き習得度の実態調査を行うことにした。このことは、調査なしに筆記体の教授の有無を教育者の立場から論じることができないと思われるからである。

1.2. 対象

大学および看護専門学校(高校卒業卒)の5つの専攻の学生(男女)449名で、全員が高卒以上で入学したばかりの1年生である。2種類の調査を実施した。(A)筆記体全般に関するもの、(B)実際に筆記体を書かせる調査である。

1.3. 調査項目

筆記体全般に関する調査(A)で、もうひとつは実際に筆記体の小文字大文字を書かせた調査(B)である。

Aの筆記体全般に関する調査項目は以下の9つである。

- ① 質問1 筆記体が読めるか
- ② 質問2 筆記体を書けるか
- ③ 質問3 筆記体を習ったことがあるか
- ④ 質問4 一つ筆記体を習ったか
- ⑤ 質問5 筆記体が読めたら良いと思うか
- ⑥ 質問6 筆記体を書けたら良いと思うか
- ⑦ 質問7 黒板に書かれた筆記体が読めなくて困ったことがあるか
- ⑧ 質問8 読めないままにしてしまったか(Q7で「はい」の選択者)。
- ⑨ 質問9 筆記体が読み書きできたら将来良いことがあると思うか

質問4を除き、すべて「はい」または「いいえ」の二者択一式強制選択をさせた。質問8は質問7で「はい」と回答した者のみが回答した。

Bの筆記体の習得度調査については、[3]を基準として採点した。

2. 結果

筆記体全般について専攻別に見た結果を2.1.で、筆記体をいつ習ったかの結果を2.2.で、筆記体の大文字と小文字の習得度テスト結果を2.3.で報告する。

2.1. 筆記体全般に関する調査

以下、2.2.1.に全体の結果を、2.2.2.に質問ごとに専攻別で結果を示した。

2.1.1. 全体

まず、専攻に関係なく質問1~3および質問5~9の全体の回答結果を図1に割合(%)で示した。

筆記体を習ったことがない学生が71%いた。(Q3)「筆記体を書けない」(Q2, 89%)学生が「筆記体を読めない」(Q1, 77%)学生を上回った。また「筆記体を読めたら良いと思う」(Q5, 86%)学生と、「筆記体を書けたら良いと思う」(Q6, 86%)学生が同率に高かった。他方、「黒板に書かれた筆記体を読めなくて困ったことがある」(Q7)学生は42%で、それら学生のうち「読めないままにしてしまった」のが44%いた。

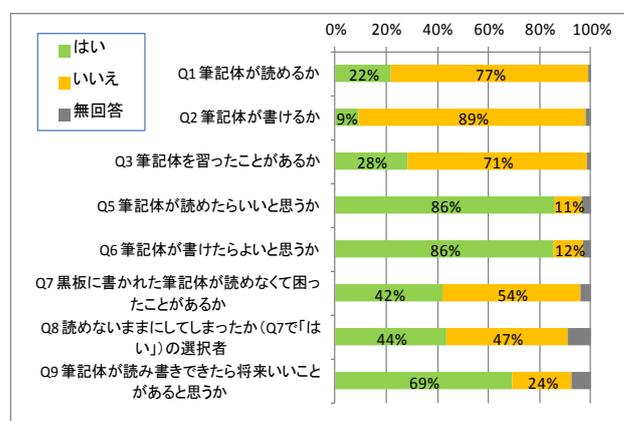


図 1: 質問別全体結果割合分布

2.1.2. 専攻別回答

「筆記体を読めるか」の間(質問1)に対して、看護専攻の比率が最高で、次に英語専攻の比率が高かった。コミュニケーション専攻の比率が最低であった。(図2)「筆記体を書けるか」(質問2)について、書ける比率は、看護専攻の比率が最大で、次に英語専攻が続き、コミュニケーション専攻の比率が最低であった。(図3)「筆記体を読める」比率と、「筆記体を書ける」比率については同じ傾向があるものの、総体的に(読めるより)書けないと思っている学生が非常に多いことが分かった。

「筆記体を習ったことがあるか」(質問3)について、筆記体を読み書きできない傾向と少し異なり、学習経験率は情報理工専攻の学生が最低であった。(図4)コミュニケーション専攻の学生は、筆記体の読み書きができる比率が最低であったが、学習経験比率も最低というわけではなかった。

「筆記体を読めたら良い」(質問5)と思う学生が8~9割いることが分かった。(図5)英語専攻が最大であ

ったが、それに対して、歴史地理専攻や看護専攻はその願望が少し低かった。「筆記体が書けたらよい」（質問 6）と思っている学生が歴史地理専攻を除くと 8 割以上いることが分かった。（図 6）

「黒板の筆記体が読めなくて困った」（質問 7）において、看護専攻、英語専攻、情報理工専攻の順に 4 割～5 割いることが分かった。（図 7）「黒板に書かれた筆記体が読めなくて困った学生のうち、読めないままにしてしまった」（質問 8）比率が 4～5 割に上ることが分かった。（図 8）

「筆記体が読み書きできたら将来良いことがある」（質問 9）と思っている学生は英語専攻が最多だった。その次は情報理工専攻であった。歴史地理専攻は半数がそう思っていることが分かった。（図 9）

専攻間における質問(1～3, 5～9)毎の標準偏差(図 11)を見ると、「筆記体が書けない」においては「書ける」との間に少し差が見られたが、全般に「はい」と「いいえ」の差はあまり見られなかった。無回答に関しては、質問 8 の「筆記体の読み書きができる」と将来良いことがあると思うか」について少し高めの差が出た。

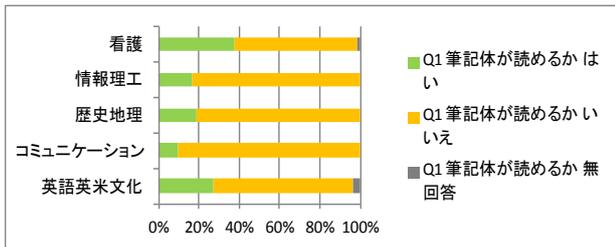


図 2: 質問 1. 筆記体が読めるか。

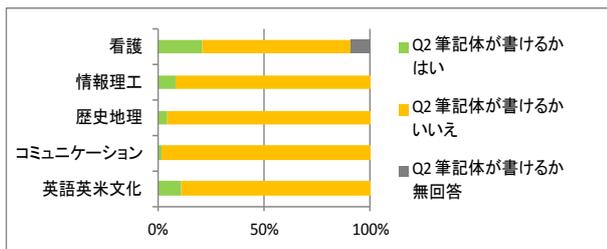


図 3: 質問 2. 筆記体を書けるか。

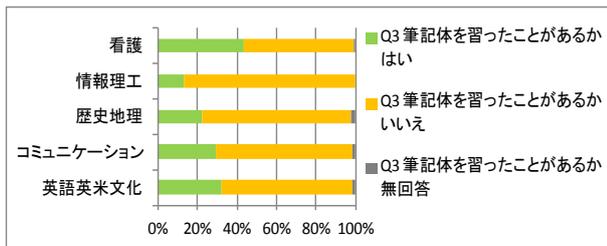


図 4: 質問 3. 筆記体を習ったか。

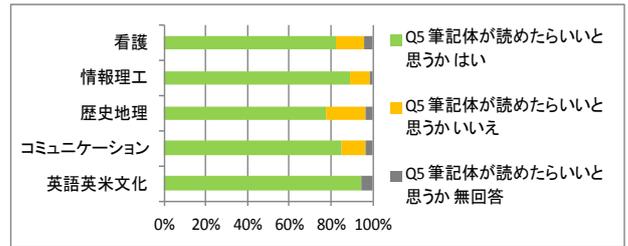


図 5: 質問 5. 筆記体が読めたら良いと思うか。

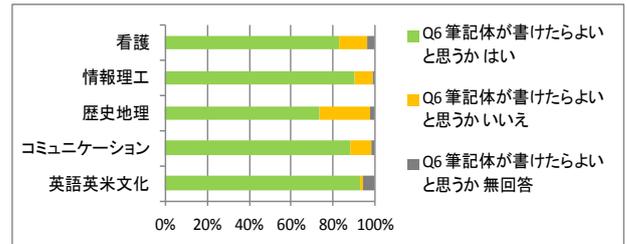


図 6: 質問 6. 筆記体を書けたら良いと思うか。

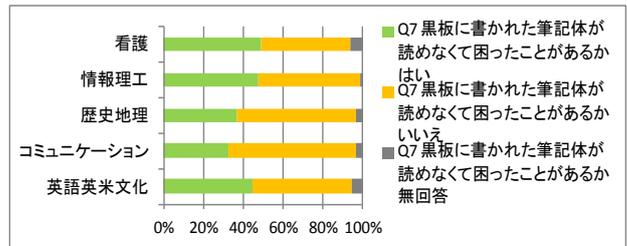


図 7: 質問 7. 黒板に書かれた筆記体が読めなくて困ったことがあるか。

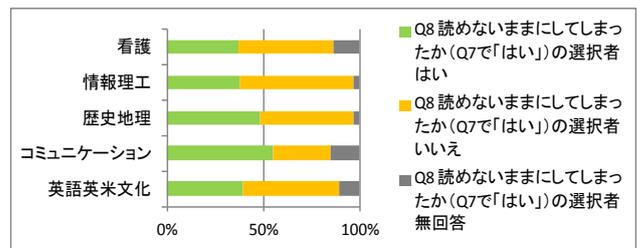


図 8: 質問 8. 読めないままにしてしまったか(Q7で「はい」の選択者)。

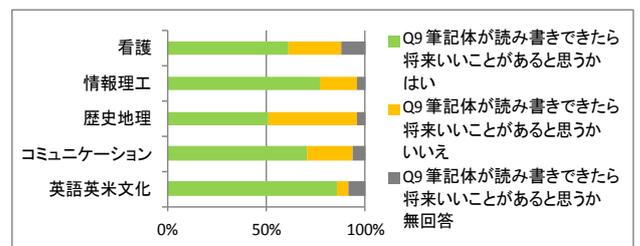


図 9: 質問 9. 筆記体が読み書きできたら将来良いことがあると思うか。

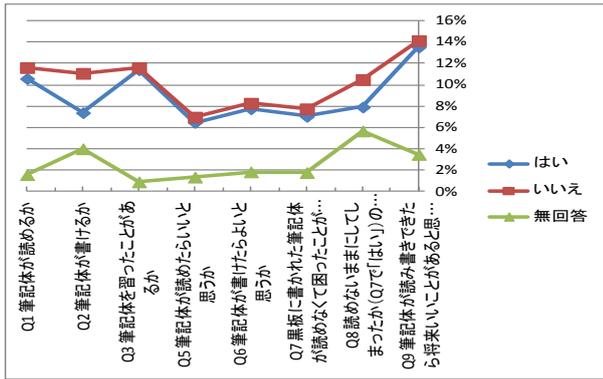


図 10: 質問別専攻間の標準偏差

2.2. 筆記体の学習時期

2.2.1. 全体結果

「いつ筆記体を書いたか」(学習時期)に関する全体結果の分布を図 11 に示した。学習経験比率は中学校段階が最大であった(67%)。次は高校(15%)、そして小学校(11%)と続いた。

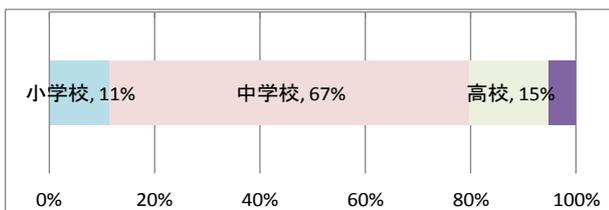


図 8: 筆記体学習時期に関する全体結果の分布

2.2.2. 専攻別結果

専攻別に見た筆記体学習時期を図 12 に示した。情報理工専攻については、高校での学習経験比率が4割と高く、中学では5割であった。一方、英語専攻は中学での学習経験比率が最高だった(83%)。また、小学校での学習経験比率は歴史地理専攻が最大であった(20%)。

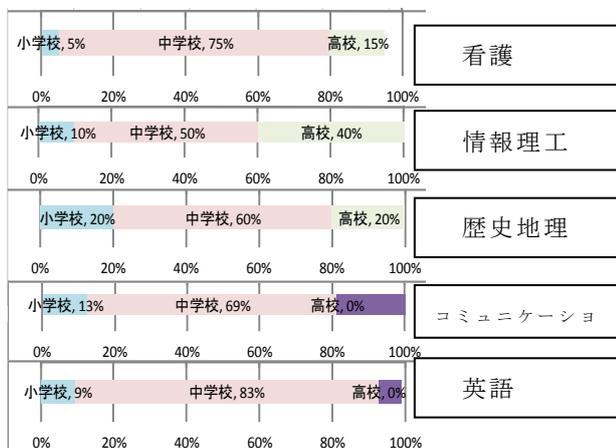


図 9: 専攻別に見た筆記体学習時期

2.3. 筆記体の習得度

筆記体の習得度を大文字と小文字に分けて分析した。なお、このチェックについては、[4]を基準にして、判別可能かどうかにより採点した。大文字と小文字の習得度(およそ書けるかどうか)の全体結果を表 1 に示した。結果、大文字筆記体のほうが小文字筆記体より書けないこと、また、その差が大きい(24%)事がわかった。専攻による標準偏差は大文字小文字ともに、小文字のほうが大きかった(14%)。

次に、専攻による大文字と小文字の習得度を図 13 に示した。コミュニケーション専攻が大文字・小文字ともに書けない比率が最大であった。大文字について、コミュニケーション専攻(98%)、情報理工専攻(98%)、歴史地理専攻(97%)専攻学生はほとんど書けないことが分かった。他方、看護専攻は、大文字(20%)・小文字(52%)ともに5専攻内では最も書けることが分かった。

専攻による大文字・小文字習得度のばらつき(表 2)を見ると、いずれの専攻でも「書けない=できない」ほうが「書けた=できた」ばらつきが大きい。その中でも、両方のばらつきの差が最大だったのは情報理工専攻であった。専攻間で比較すると、小文字の習得度のばらつきは看護専攻が最大であった。大文字のばらつきは、看護専攻、情報理工専攻とも同じで次に英語専攻が続いた。

表 1: 大文字と小文字筆記体の正解率

	大文字		小文字	
	できた	できない	できた	できない
Mean	8%	92%	32%	68%
SD	7%	7%	14%	14%

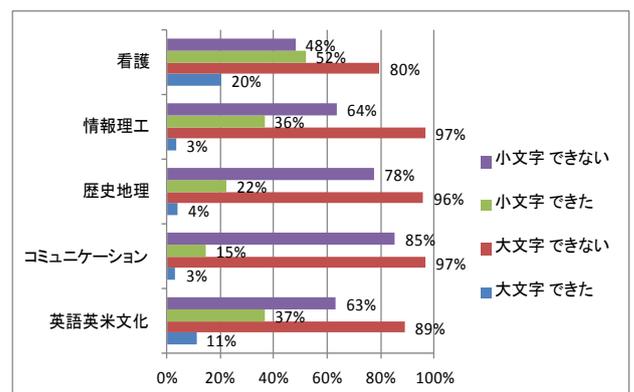


図 10: 専攻別大文字・小文字習得度テスト結果

表 2：専攻別大文字・小文字習得度標準偏差

		英語英米	コミュニケーション	歴史地理	情報理工	看護
できた	大文字	5%	4%	4%	2%	9%
	小文字	5%	4%	4%	2%	9%
できない	大文字	13%	9%	11%	14%	14%
	小文字	13%	9%	11%	14%	14%

2.3.1. 大文字の習得度

図 14～18 は、専攻内での大文字の筆記体習得度をアルファベット順に書けた(=できた)、書けない(=できない)の分布で示したものである。いずれの専攻でも 26 文字の中で正解率は低いものの C が最も書けた文字であった。

英語専攻の中で、大文字の正解率が 5%未満のアルファベットは、F, G, Q であった。

コミュニケーション専攻では、大文字の正解率が 5%未満のアルファベットが、D, E, F, G, H, I, J, L, P, Q, R, T, U, V, W, X, Z と大文字をほとんど書けないという結果が出た。

歴史地理専攻については、コミュニケーション専攻と同様、大文字がほとんど書けないという結果であった。

情報工学専攻については、大文字が 5%以上書けたアルファベットは 3つしかない。

看護専攻については、大文字が正解率 5%未満のアルファベットは一つもなかった。



図 11：アルファベット順にみた英語専攻の大文字筆記体習得度の分布

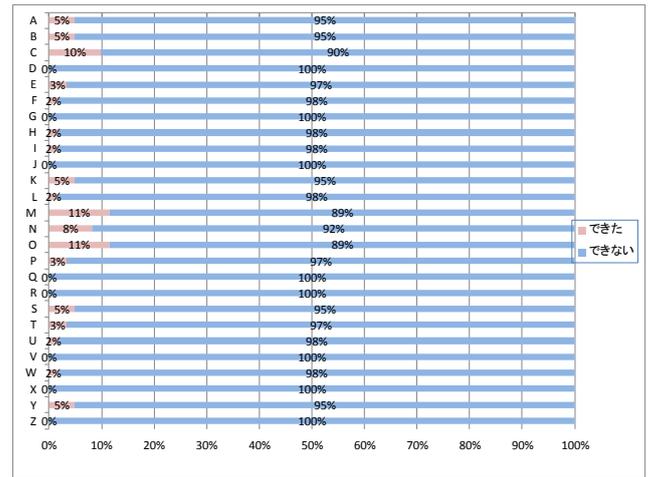


図 12：アルファベット順にみたコミュニケーション専攻の大文字筆記体習得度の分布

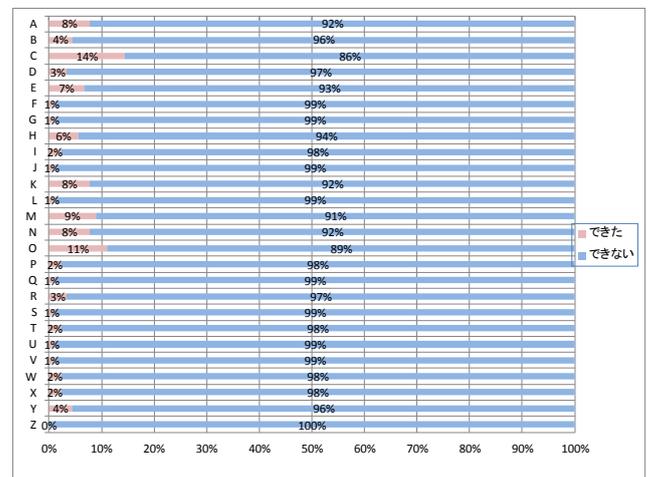


図 13：アルファベット順にみた歴史地理専攻の大文字筆記体習得度の分布



図 14：アルファベット順にみた情報工学専攻の大文字筆記体習得度の分布



図 18： アルファベット順にみた看護専攻の大文字筆記体習得度の分布



図 20： アルファベット順にみたコミュニケーション専攻の小文字筆記体習得度の分布

2.3.2. 小文字の習得度

図 19～ 23 は、専攻内での小文字の筆記体習得度をアルファベット順に書けた(=できた)、書けない(=できなかった)の分布で示したものである。どの専攻でも大文字より小文字のほうがずっと書けることが分かった。

英語専攻において、正解率 20%未満の小文字は、f, z であった。コミュニケーション専攻においては、f, g, h, i, k, l, n, o, p, q, r, s, t, u, v, w, x, y, z とほとんどが正解率 20%未満であった。f, z の正解率の低さは英語専攻と共通であった。歴史地理専攻においては、f, i, p, r, s, v, w, x, z が正解率 20%未満であった。これら小文字すべてについて、英語専攻とコミュニケーション専攻において正解率が 20%未満という点では共通していた。情報工学専攻も f, r, z が正解率 20%未満と低かった。看護専攻においては、正解率 20%未満の小文字はなかった。

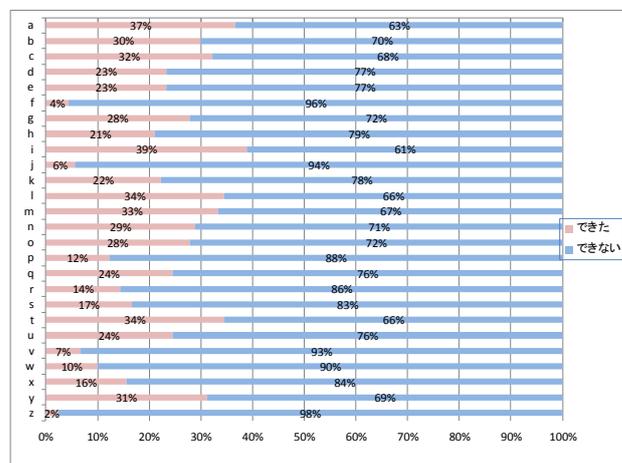


図 21： アルファベット順にみた歴史地理専攻の小文字筆記体習得度の分布

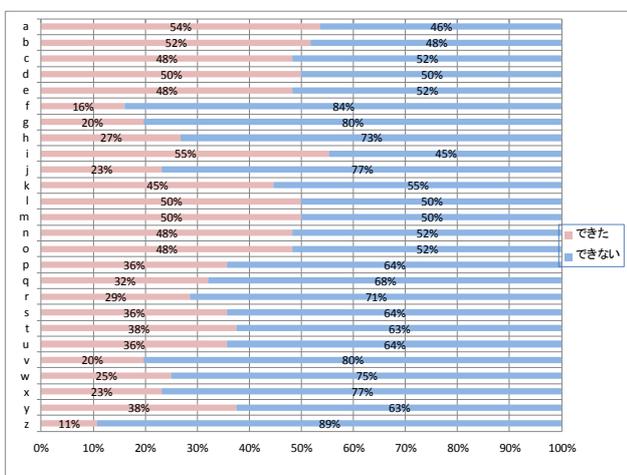


図 19： アルファベット順にみた英語専攻の小文字筆記体習得度の分布

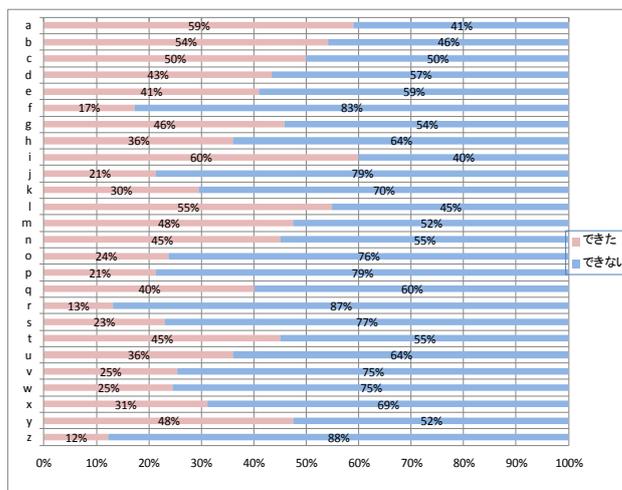


図 22： アルファベット順にみた情報工学専攻の小文字筆記体習得度の分布



図 15：アルファベット順にみた看護専攻の小文字筆記体習得度の分布

3. 考察とまとめ

以上の調査およびテスト結果から次のことが明らかになった。まず、筆記体全般に関する調査(A)の9つの設問について、

- (1) 筆記体を習ったことがある学生は 28%にとどまった。その数のうち、筆記体の学習時期は中学時代が最大であった。ただし、高校時代や小学校時代という回答もあった。
- (2) 筆記体は読めないし書けない比率がその逆よりずっと高かった。さらに、書けない比率は読めない比率より高かった。
- (3) 筆記体が板書される時、読めないままにして困った学生が 42%いて、またその学生の 44%は読めないまま過ごしてしまっていた。
- (4) 筆記体が読める、書けるほうが良いと思う学生が全体に 86%と圧倒的に多かった。さらに、将来筆記体を読み書きできたら将来良いことがあると思う学生も7割近くいた。ただし、後者の質問のばらつきは全体の質問の中で最大であった。

また、筆記体の習得度調査(B)について、

- (1) 大文字は小文字よりもずっと低い
- (2) 専攻が異なっても、正解率の低いアルファベットに共通点があった。
- (3) 正答率は看護専攻が最高であった。

以上から、まず、学生が筆記体を大学レベル前の教育課程で学習機会があまり与えられなかったことが明らかになった。そのために筆記体を読み書きできないという結果が出るのは自然なことであろう。筆記体をどの時期で教えるかどうかについて、文部科学省[5]の中学校指導要領第9節外国語の第2 各言語の目標及び内容等の3 指導計画の作成と内容の取扱い(1)の

オ」には、「文字指導に当たっては、生徒の学習負担に配慮し筆記体を指導することもできること。」とだけある。これは平成10年の学習指導要領からこのように変わったものである。これにより英語教育の中から筆記体教育は除かれてしまい、本調査における結果が生み出されたと言えよう。ただし、回答において、ローマ字とアルファベットの学習時期を混同していた可能性があることは留意を要する。他方、学習者の側に筆記体を読み書きしたいという願望があることや筆記体の習得が将来の利益につながると思っていることが明らかになった。

筆記体は文字という学習・教育手段の一つであるが、分からないまま放置した比率が高い点は特に憂慮すべきである。このことは即ち学習内容が十分理解できないまま放置したことに繋がる。現在はパソコン等を利用した英語教育も盛んであるが、大学レベルだけでなく教師が板書などの方法で教授する方法は未だ多く存在する。本調査では英語のみを取り上げたが、アルファベットを使用する言語学習にも同様の傾向が見られると予測する。学習機会は国内に必ずしも限る時代でもない。従って、教育効果を考慮した場合に、筆記体を何時、どの段階で、どのような方法で教えるのか再考すべきであろう。本調査結果を見る限り、学生の願望からすれば筆記体を教授する意味があると思える。ただし、小学校に英語教育が導入されている現在、それが大学レベルで行われるべきでないことは確かだ。

本研究に関連して、今後はさらに詳細な統計分析をすることや、入学後の経年変化について比較検証することも有意義であると思われる。できれば他のレベルの同様の調査も行いたい。

謝 辞

本研究の調査にあたり、中部大学人文学部コミュニケーション学科の柳谷啓子先生、歴史地理学科の大塚俊幸先生、工学部情報工学学科の高丸尚教先生、大宮医師会看護学院等のマッティ・ヤーッコラ先生には調査にご協力いただいた。名前を記してお礼申し上げる。

文 献

- [1] 富山真知子, “筆記体を読めない, 書けない大学生,” 大学時報 56(313), 98-103, 日本私立大学連盟, 2007-03.
- [2] 世界の文字の図典, 世界の文字研究会(編), 吉川弘文館, 2009.
- [3] D. Crystal, *The Cambridge Encyclopedia of Language*, Cambridge Univ. Press, 2010.
- [4] はじめての筆記体 *The Alphabet Handwriting Book 2*, 児童英語研究グループ, むさし書房.
- [5] 中学校学習指導要領第9節外国語,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/010.htm, p.5, 2012.